

火山誕生を見守り続けた郵便局長 三松正夫記念館

三 松 三 朗¹⁾

火山の誕生と三松正夫

第二次世界大戦の敗色が次第に色濃くなった1943年12月28日、有珠山北西麓の洞爺湖温泉街を中心に突然地震が頻発し始めた。当時、壮瞥村の郵便局長であった三松正夫は、1910年有珠山噴火の際に東京大学の森房吉先生の現地観測を手伝い、「火山噴火に遭遇した者の責務は、その時あった事の詳細を客観的・科学的に観察し、次期噴火の防災に資する事である」と教えられていた。また「火山を科学しようとする者にとって、噴火の時こそが千載一遇のチャンスであり、その機を失すると生涯再びその火山の噴火に出会えるかどうか分からない」ということも理解していた。

初震と同時に、これは有珠山が動きだしたと察して直ちに現場に走り、その時が来たと判断した三松正夫は知己を得ていた多くの火山学者に異変を打電した。しかし時悪く、科学者は戦争に役立つ調査・研究に追われ、その一部始終を現場で見届ける時間的余裕がなかった。軍部・官警は地域住民の防災対応どころか、この地変を如何に極秘とするかに腐心するばかりであった。地域住民にとっては正体不明の患者が出たのに、医師が往診に来てくれない時の様な、この先どうなるのかという不安に怯える状況であった。

三松正夫はやむを得ず自ら行動を起こし、詳細な観察に努め、それを科学者に報告書として送り、それを解析した科学者の指示により、新たな視点で観測の幅を広げていった。地震の中心は一週間後には場所を180度転じて東南麓の伊達と壮瞥の村界に移動、さらに北上を続けながら、一帯の田畑・山林・集落・道路や鉄道を隆起させ、それに伴う地殻変動で惨憺たる状況となった。正夫は丹



写真1 三松正夫記念館外観。

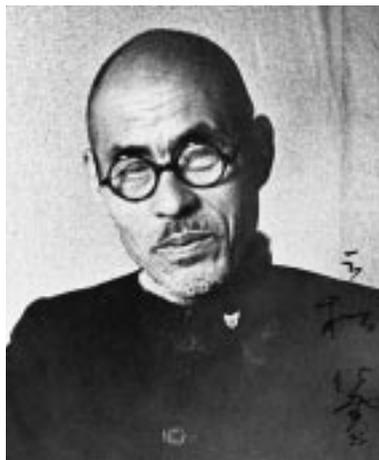


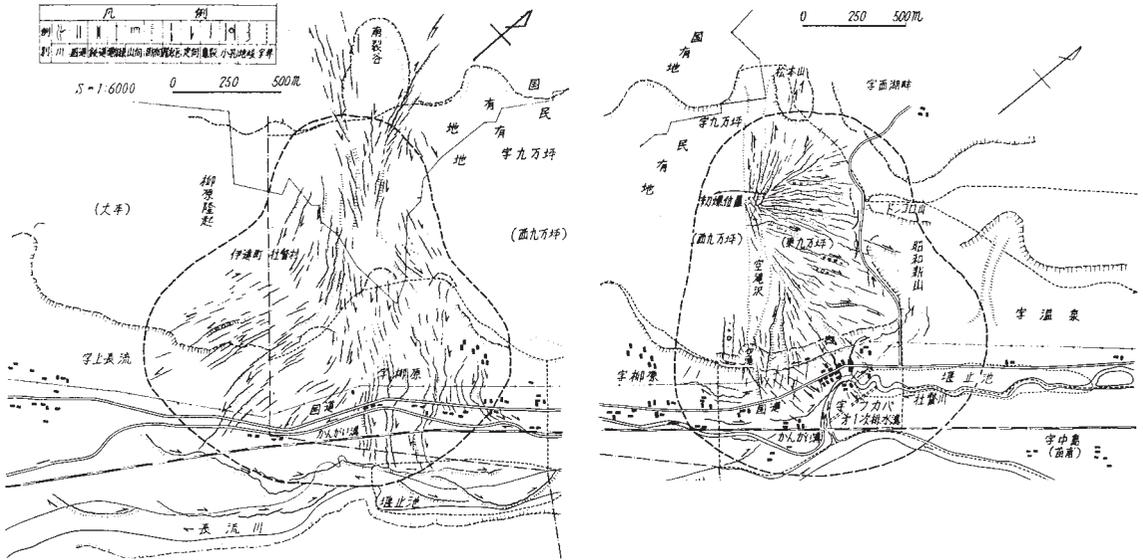
写真2 1943年、三松正夫は既に56歳であった。

念にこの事実を調べ、時系列で詳細な亀裂・断層の分布図(第1図左)を残し、一点を中心に放射状に延びる亀裂群を確認している(第1図右)。まさしくマグマ上昇に伴う山体膨張である。東京大学の水上武先生(写真3)も偶然その近くに地震計を設置しておられ、無感地震であるのに、細かく揺れ続ける不思議な地震波が継続するのを確認しておら

1) 三松正夫記念館館長:

〒052-0102 北海道有珠郡壮瞥町字昭和新山184-12

キーワード: 火山を愛し、火山に学ぶ



第1図 左：柳原及び上長流方面の亀裂と地皺進展状況平面図(1943(昭和18)年12月～1944(昭和19)年4月)．右：東九万坪・フカバの亀裂と地皺進展状況平面図(1944(昭和19)年5月～1944(昭和19)年6月)．左図の右下端の境界線が右図では左下にあり、活動域の移動がわかる。



写真3 現地調査時の東京大学水上 武先生(左)とゲートル・ワラジ履きの三松正夫(右)。



写真4 昭和19(1944)年7月11日第5次大爆発。噴煙は地を這い、火砕サーージは洞爺湖対岸の洞爺村へ駆け抜ける。

れた。これがマグマの動きを捉えた最初の記録で、今日「火山性微動」と認識されているものである。1944年6月23日、遂にその放射状断層群の中心から噴火が始まった。上昇するマグマが地下水と接触し、激しい連続的な水蒸気爆発が起きた。爆発的噴火は10月中旬まで続き、この間、新火口が形

成されるたびに正夫は危険を冒して登山し、その位置・径・深さを調べるなど、素人の限界を超えた努力を続けた。正夫は火山を注目し続ける中で、最大級の爆発が一息ついた直後が、最も危険が少ないという“噴火のリズム”を体得していた。

特筆すべきは7月11日の噴火現象の記録である。当時東京大学の水上 武先生が伊達に滞在中であり、この噴火が“熱雲(火砕流)”発生ではの疑念



写真5 1944年9月20日有珠東外輪より隆起する新山を望む。前方噴煙は第4火口、後方噴煙は第5火口。



写真6 1946年活動停止後の新山。火山灰に覆われ、浸食はまだ軽微。

を持ち、官警に嚴重注意を促されたが、戦時下住民に動揺を与えない様にと伏せられたのであった。このため、有珠山の噴火に伴う熱雲は江戸時代のみとの誤解を与え、1977年噴火時の防災対応の教訓となり得なかった。しかし、雲仙普賢岳災害後の再点検で、三松正夫の記録と彼の残した写真から(写真4)、これは極めて危険な現象を伴った火砕サージであったことが確認された。

活発な噴火活動が終息した1944年10月下旬以降、再び地震活動が活発となり、不審に感じた三松正夫が調査のための登山を続ける中、丸くとり囲む様に位置する火口群(写真5)の中央の部分から固結溶岩が推上しているのを確認した。溶岩は最速時2m/日のスピードで上昇し、終戦直後の

1945(昭和20)年9月20日、屋根山上から110mの溶岩ドームを推し上げ、海拔407mに達して完全な終息を見た。(写真6)

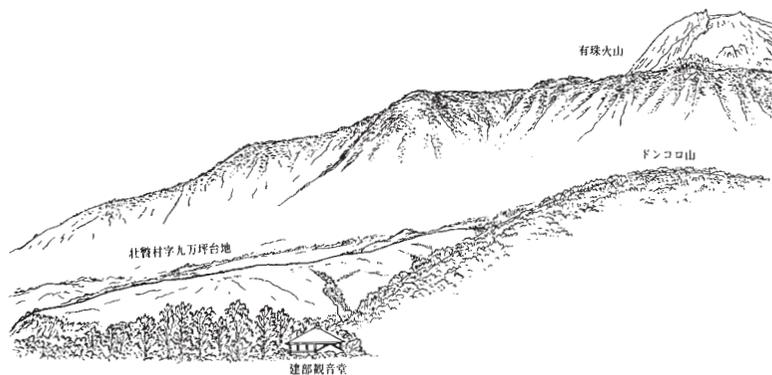
正夫は定点からの計測を繰り返し、翌日30cm沈降した事を確認し、マグマが手を引いたと確信したという。

ミマツダイヤグラム

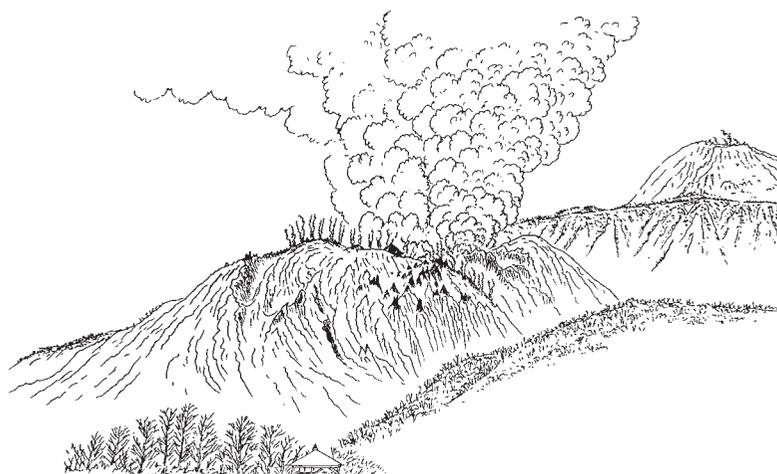
三松正夫は東九万坪地域に地震と地殻変動が集中したことから、ここに新火山が誕生することを予測し、郵便局裏を定点として、試行錯誤の末に簡単な手法で(第2図)、連続スケッチを描き続け(第3, 4, 5図)、後に稜線のみを一枚の図に重ねた



第2図 創意工夫による簡易定点観測法。目線が一定になるように顎を載せる台を固定、水平にテグス糸を張って基準とした。



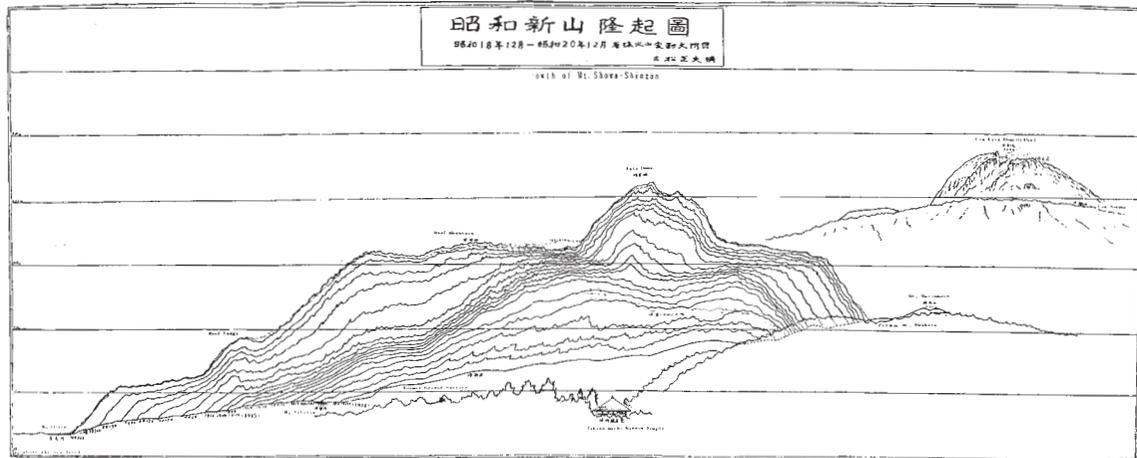
第3図 活動前の壮瞥村字九万坪台地. 後方は有珠火山, 前方はドンコロ山と建部観音堂.



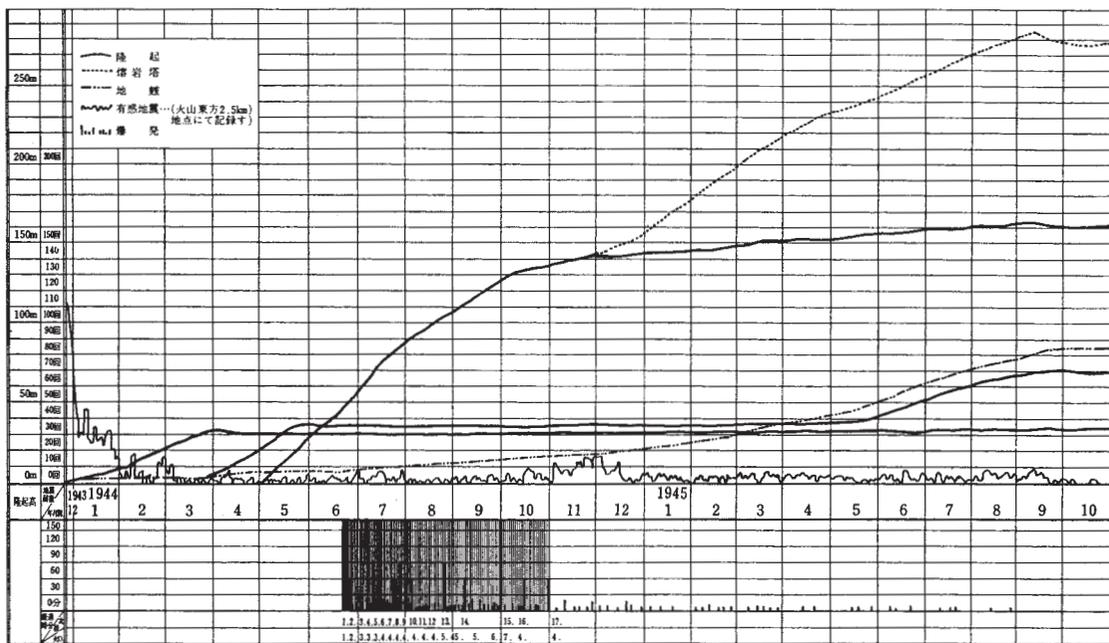
第4図 全山が膨大, ことに火口群中心部の上昇とともに, 黒色大岩体を白煙中に見いだしたが, 熔岩塔か否か不明 (1944年11月23日).



第5図 引き続き活動中の全山は本日午前8時に一斉に停止状態となった. なお観測を継続する (1945年9月20日).



第6図 ミマツダイヤグラム(1).



第7図 ミマツダイヤグラム(2). 地震・隆起・爆発・地皺・熔岩塔 月別表.

「昭和火山隆起図」としてまとめた(第6図)。さらに活動開始から終息までの観測資料を集大成し、郵便局における体感地震回数と噴火・隆起の時系列相関関係図を作成し(第7図)、この2点は1948年ノルウェーのオスロ市で開催された万国火山会議に田中館秀三先生のご尽力で提出された。参集の関係者が戦時下の日本の僻地であった火山誕生の詳細な記録が、素人の手で残されていたことに驚嘆し、以降この2点の絵図を“ミマツダイヤグラム”

と称すべしと決されたということである。

三松正夫は幼少の頃より絵描きになりたいという夢を持ち、絵を得意としていた。この事により、写真フィルムの入手が困難な戦時下に関わらず、文字記録のほかに、数多くの絵図を残し得たのであった。

昭和火山を「わが子」と称し、火山買収後は雅号も“愛山”と称する様になり、終生火山を友とし、愛し続けた。最近になって、有名な美術評論家が、



第8図 「溶岩塔堆上」三松正夫画/紙(60×52cm)昭和48年遺作(未完)。

正夫の絵図を“作品”として高く評価され、美術誌に再三紹介して頂いている(第8図)。

昭和新山を火山の標本に

火山誕生後、三松正夫は、その成長過程が世界で初めて確認された『隆起型火山』の極めて貴重な標本であると考え、また地球の破壊力と再生力を末永く見届けるために一帯を保全すべきと考えた。加えて麦畑が火山に変わって生活の術を失った罹災農民の救済のためにも、国・道に保護方の陳情活動に奔走した。が、災害の元凶である火山の保護など有り得ないと相手にされず、やむなく私財28,000円を投じて主要部分42ha余を買取り、個人で管理することを決断したのであった。

敗戦直後の、食べる事さえままならない混乱期にあって、未来を見据えた三松正夫の行動は、自然保護の先駆者として高く評価されるべきであろう。この決断により、「世界で唯一人の活火山所有者」と珍しい肩書きをもつこととなった。しかし、このことにより高度成長、金儲け至上主義の時代に入り、昭和新山の一帯が日本有数の観光地となったことで、正夫は開発志向に対する頑固な抵抗勢力と位置づけられ、終生俗世間との戦いに明け暮れることになった。

2004年5月号

三松正夫記念館の展示物と活動

三松正夫記念館は、幸か不幸か一個人の手元に残された火山誕生の記録を死蔵せず、広く活かすことを目的に、1969年6月に「昭和新山資料館」として開設した。正夫は1888年の磐梯山崩壊の年に生まれ、生涯三度目となる1977年の有珠山噴火を体験し、その年12月に没した。正夫が89年の生涯を通して訴えた「噴火を単に災害とせず、火山から学ぶ心」を次世代に伝えるため、没後10年を機に「三松正夫記念館」と改称し、火山資料だけでなく、故人の作品・記念品なども加えて公開している。そのほか、過去を知るということから2000年噴火火砕サージ地層、1663年Usu-b地層、江戸時代4回の噴火地層、そして2001年に実施されたトレンチ調査(埋め戻し済)から、1663年噴火と1769年噴火の間にも有珠山の噴火(1700年代初頭?)があったことを証する地層の剥ぎ取り標本も展示している。

有珠山に関わる防災啓発運動の核となる施設とすべく、関連資料の収集保存に努め、施設スペースの関係で非公開ながら、関連図書、文献等3,500余冊、数少ないと言われる昭和新山生成期の記録写真600点のほか、テレビニュース・特番関係のビデオ映像・新聞記事を多数所蔵し、希望者の要望に供している。

1954年両陛下下行幸時天覧に供した絹地彩色絵図・ミマツダイヤグラムを始め、保存上問題のない範囲で原図を展示するようにしている。が、テレビ時代に育つ修学旅行の小中学生には、この静的展



写真7 館内での質疑応答。入館者は自分たちの知らないことに目が輝く。

示では今ひとつ人気がないのが悩みである。時間を頂いて解説し、質疑応答することで(写真7)、興味がわくように努力している。

子供達の最大の疑問は「なぜ郵便局長が素人なのに火山の観察をしたのか」「なぜ火山を買ったのか」「また噴火するのか」である。一方、大人の関心事は「買い取った金額を今の値にすると?」「固定資産税はかかるのか」「なぜ自分の山で金儲けをしないのか」に集中して寂しい限りである。が、“戦中戦後”の混乱の時代を生きた中高年層の人々は、戦争の陰で自分の知らなかった出来事に興味が尽きないのか、時を忘れて丹念に見て頂くことがある。

利用者はオープン以来、年間1万人余で推移し、個人運営には厳しい状況であるが、この施設を通して、熱烈な三松正夫ファンと火山愛好者が全国・世界に年々増えている。雲仙に消えたクラフト夫妻、正夫の生涯をアニメ映画にしたカナダ人、作品に正夫の『心』を描いたコミック作家・小説家、地域の防災の核となって活躍している行政マンなど、そして記念館で知り合えた多くの火山研究者との交流、これこそがこの施設の金銭に替えられない宝である。

時間つぶしのつもりで入られた方が多額のご厚志を「御霊前にお花でも」と置かれたり、命日に見知らぬ方から正夫の年譜をメモしてきたのと供物が届けられたり、正夫没後年月を経てなお、人の心に感動を与えている事が嬉しい限りである。

個人立の限界で器は日本一小さな博物館と自称する程狭小であり、走り抜ければ5秒、丹念に見て頂くには数時間を要する程、所狭しと主要資料・記録写真を展示している。施設が小規模であることが幸いして、入館者のつぶやきまで手に取るようにわかり、「展示施設」を脱し、「対話のできる施設」とすべくあらゆる疑問に応えるように努力している。

特に噴火の写真を見て「怖い!」という人には、火山の平穏期に無意識のうちに受けている恩恵部分を併せて理解し、非日常的な自然災害に備える心を持つと訴えている。

さらに営業的には負担が大きい、持ち帰ってより深く火山への興味を深められるように、三松正夫の全観測資料「昭和新山生成日記(和文・英訳



写真8 山頂から自分の家・学校を探す。ヘルメット着用で緊張感を高める。

版)」等の有珠山をはじめ火山に関する市販本・自家出版本、地質図などできるだけ多くを準備して利用者の便を図る様に努力している。

最新版としては動くミッツダイヤグラム、定点スケッチ原画、主要記録写真と彩色画を取めたCD-ROM『電子三松正夫記念館』が好評である。

国指定特別天然記念物『昭和新山』は弊館の屋外展示物である。見るのは自由であるが、記念館で三松正夫の想いと汗を肌と感じた上で、改めてこの山を見る時、別の新しい感動を覚えて頂けると信ずる。

従前は一般に開放し、地熱・噴気音を感じて生きた火山に親しんで頂いていたが、残念ながら、有珠山1977年噴火のあと、ドーム崩落の危険があるとして、国立公園の管理者である環境省と北海道の意向で、観光客の事故防止のために入山が規制されている。当該地区を管理する当館としては、火山を科学する絶好のフィールドとして活かすべく、危険性については自己責任である事を理解し、目的を持って入山を希望する者(原則的にグループ単位)に限り登山ガイドを実施しているが、希望者は3週間程前に下記への連絡をお願いしている。

壮瞥町教育委員会主催の小学生を対象とした

「子供郷土史講座」では、昭和新山登頂コースを組み込んで、1983年以来続けている。この事業は、地元の子供たちにとって緑の回復した昭和新山は遠くて小さな丘でしかないが、山頂から見下ろすわが町が火山麓にあることを認識し、溶岩熱を利用して調理した卵や芋を食べることで生きている火山を体感させ、さらに危険体験を通して「自分の命は自分で守る」という防災の原則を身に付けることを目的にしている。

この事業の初期に参加した少年が、2000年噴火時には役場の防災対応の核として活躍してくれた。火山防災教育では、次の噴火の当事者となる青少年を対象に進めておくことが大切であることが実証された。記念館では、この成果を踏まえて一般を対象とした年2回の登山会、各地の小中学校「総合学習」の火山学習(写真8)に記念館の事業として積極的に受け入れている。

三松正夫記念館

休館日 原則年中無休(冬期間臨時休館あり要確認)

開館時間 通常8:00～17:00 冬季9:00～16:00

入館料 高校生以上 300円(消費税込み)

20名以上団体割引 250円

所在地 〒052-0102

北海道有珠郡壮瞥町昭和新山184-12

(道南バス終点「昭和新山」より徒歩5分)

*路線バスは冬期間運休

TEL・FAX: 0142-75-2365

e-mail: m.museum@eagle.ocn.ne.jp

昭和新山・三松正夫関係参考図書(学術論文を除く)

三松正夫(1995): 昭和新山生成日記復刻増補版. 三松正夫記念館.

三松正夫(1995): 昭和新山. 三松正夫記念館.

三松三朗編(1997): 温故知新～明治活動以前史料集～. 三松正夫記念館.

三松三朗編(1997): 火山ハンドブック～有珠山・昭和新山～. 三松正夫記念館.

三松正夫記念館(2003): CD-ROM電子三松正夫記念館.

三松正夫記念館(1979): 愛山～三松正夫追悼遺稿集～. 自家出版.

S. MIMATSU (1992): GUIDE-BOOK TO SHOWA-SHINZAN OF USU VOLCANO. 三松正夫記念館.

M. MIMATSU (1995): Showa-Shinzan Diary: 昭和新山生成50周年記念事業実行委員会.

昭和新山生成50周年記念事業実行委員会(1994): 麦圃生山～昭和新山記録写真集～.

寺田 和(1976): 燃える山～三松正夫の昨日・今日～. 自家出版.

三松三朗(1990): 火山一代～昭和新山と三松正夫～. (株)北海道新聞社.

新蔵博雅(1975): 昭和新山. (株)北海道新聞社.

三松正夫(1974): 昭和新山物語～火山と私との一生～. (株)誠文堂新光社.

三松正夫(1970): 昭和新山～誕生と観察の記録～. (株)講談社.

手塚治虫(1995): 火の山. (株)文芸春秋.

新田次郎(1977): 小説「昭和新山」. (株)文芸春秋.

桜井信夫(1982): わが子昭和新山. PHP.

八木健三(1973): 生きている火山. 福音館書店.

諏訪 彰(1965): 畑から盛りあがった山. 中学1年「新しい国語」. 東京書籍(株).

MIMATSU Saburou (2004): MIMATSU MASAO MEMORIAL MUSEUM.

<受付: 2003年12月24日>